

長野県植物研究会の歩み

清水 建 美

昭和42年に発足した「長野県植物研究会」は、昭和61年、20周年を迎えました。この年を記念して、夏には、松本市を中心におこなわれました国際アルピニスト大会と呼応して、長野県自然保護の会と共催で自然観察会を開きましたし、今年の2月1日には松本市勤労者福祉センターで記念大会をおこないました。そして、本誌20周年記念号のためには、全国の学会最前線鋭敏の植物学者の皆さん15名の方から特別寄稿を頂くことができ、ここに発刊の運びとなった次第です。ここまで、会員の皆さんはじめ私たちの会を有形無形に御支援下さった全国の同好の皆さんに厚く御礼申し上げます。同時に諸種の20周年記念行事開催に際しましては、信州大学・長野県教育委員会・松本市教育委員会・信濃教育会・松本商工会議所・信濃毎日新聞社の関係各位から格別の御芳志を給いました。改めて御礼を申し上げます。この機会に、私たちの会の20年の歩みをつづておきたいと思います。

1. 研究会の発足

長野県は自然に恵まれた県である一方、伝統的に教育県として自然の研究は盛んです。日本植物学会は1883(明治16)年にできましたが、長野県では1886(明治19)年に信濃教育会ができ、1890(明治22)年発行の「信濃教育会雑誌」には早くも羽田貞義氏の「戸隠山植物採集」という記事が出ていますし、1902(明治35)年には信濃博物学会が発足、「信濃博物学雑誌」が発行されました。信濃教育会は現在なお健在ですし、信濃博物学会は1913(大正2)年に一たんなくなりましたが、その流れは信濃博物会(大正14年発足)に続き現在に至るまで信濃生物会へと受けつがれてきました。

このような風土の下にあっては、県内各地には植物の研究者やかくれた研究はかなりの数に上るだろうことは想像にかたくありません。しかし、残念なことに具体的にどこでどんな方がどんな研究をされているかについては互いに知りえず、互いに知識や情報の交換を行うという組織はありませんでした。信濃教育会は学校の先生方の専門を問わない幅広い集まりですし、後者は高校の生物の先生方を中心とした主として教材に関する研究団体であったからです。そこで、長老の先生方のお勧めもあり、互いに研鑽する場や研究発表の機会をつくり、あわせて植

物学発展のための底辺たらんと、有志が相寄って新しい研究会の設立について語り合ったものです。中でも、中山冽(現佐久城山小教諭)・林一六(現筑波大学助教授)・平林国男(現大町山岳博物館長)の3氏の熱意は旺盛でした。この3氏に私も加わって会則の原案を作成し、心当りの方々に参加を呼びかけるなど準備をととのえ、1967(昭和42)年6月4日、信州大学教養部南棟2階の一室で設立総会を開き、「長野県植物研究会」を結成したのでした。この時、私たちは、本会が長野県の植物研究者の親ばくと向上を計ることを目的とし、例会を年6回開き、年1回会誌を発行することを、会則によって内外に宣言したのです。初年度の会員は28名(うち、県外会員0)でした。

2. 研究会の活動とその足跡

(1) 会員数 発足以来、長野県植物研究会はまずまず順調な発展を続けています。2回ほど前年度より減ったこともありましたが、今年度は258名になり、特に、発足当初には10名にも満たなかった県外の会員の方が100名を越えました。全国の皆さんの暖かい御支援のおかげと感謝しています。参考までに会員数の推移を5年ごとに集計してみました。

会員数の推移

年 度	総 数	県 外
昭和42年	28	0
47	76	19
52	187	76
57	229	97
62	258	116

(2) 会誌 長野県植物研究会では、年1回の会誌の発行を活動の最重点においています。幸い、発足以来欠かすことなく、毎年4～5月に発行を続け、最新号は昨年5月に出した第19号になりました。第1～3号(昭和43～45年)は孔版印刷でしたが、第4号(昭和46年)以降は写植印刷です。第10号(昭和52年)は10周年記念号として出しました。この記念号には、故原寛先生をはじめ、分類学や生態学分野の権威の先生方からの15篇の記念論文および故前川文夫博士の記念講演の内容が収録されています。

第11号からは逐次刊行物の国際登録誌に昇格, ISSN 0385-9916の番号を頂き, 表紙右上に記すことになりました。さらに, 第18号の折に日本学会会議の審査をパスし, 「学術刊行物」の認可を得ることができました。つまり, 私たちの会誌は学術誌として通用することが証明されたのです。ですから安心してどんどん質の高い論文をお寄せ頂きたいと思います。学術刊行物のいま一つの利点は, 郵送料が助かるということです。17号までの郵送料は1冊200円でしたが, 18号からは50円で送ることができます。これは, 会の運営にとってもたまらない魅力です。

さて, 会誌の内容は, 通常号の場合, 例会における講演の内容および会員からの投稿論文, 「植物ニュース」と題する短報や会員の著書の紹介などからなります。「植物ニュース」は, 第9号から始められ, 本号でその記事は111を数えることになりました。私は植物の形質や生活に関する観察事実はたとえ断片的な記事にしる確実に記録しておくことが必要だと考えています。そのような事実の積み重ねがあつてこそ初めて大きな発見が生れるものだからです。会員の皆さんは, 遠慮されることなく植物ニュースをお寄せ下さることを期待しています。

会誌は, 会員に配布されるだけでなく, 県外・県内のできるだけ多くの研究団体と交換するよう努めています。昭和61年度には全国の62の機関や団体から機関誌などの寄贈を頂きました。こうした各地の出版物は何よりも地元と直結した情報源で, その多彩な植物の観察記録や分布のデータは決しておろそかにすることはできません。私は, 今後もさらに情報交換のルートを充実していきたいと思っていますので, 各地の研究団体の有無や資料交換の可否について読者の皆さんの御教示を頂ければ幸いです。

なお, 本会誌は先方の要望にこたえ, ニューヨーク・モスクワ・ロンドンにも送られています。そのお返しとして, ニューヨーク植物園からは, 交換図書雑誌目録にも記してありますように, Bulletin of Torrey Botanical Club が送られてきています。9年前, ニューヨーク植物園から会誌の交換を申し込まれたとき, すべて和文の記事だから役に立たないのではないかと返事をしました。ところが, 日本語を読める人は本園にも何人もいますからぜひに——ということになったのです。このことは, 本会の会誌が数は少なくとも外国の研究機関からも注目されていることを意味します。現在, 論文のタイトルを英文でつける以外には英文を使用せず, 欧文の摘要もつけてはいませんが, 将来はこの国際化時

代にそなえて欧文摘要をつけることぐらいは必要ではないかと考えています。

(3) 例会 本会のもう一つの活動方針は, 年6回の例会を行うことです。そのうち2~3回は夏から秋にかけての採集会, その他では講演と年1回のシンポジウムが企画されます。シンポジウムは特定のテーマの下で, 若手の研究者を講師に招いて行われます。最新の例会は3月に行った第117回です。昭和53, 59, 60年度には日本植物学会中部支部の大会および例会と昭和54年度には日本植物分類学会の春季大会と合同で行い, 事実上, 当該学会の行事を成功させました。そして, 昨年から年1回程度実習をとり入れることにしました。昨年は, クロマトグラフィーによる色素の分析, 今年は花粉の形態とプレパラート作成をおこないました。

(4) 長野県植物誌の編纂 昭和53年度以降, 研究会内に「長野県植物誌編纂委員会」ができ, 調査活動が続けられています。野外調査によってえられた植物標本のデータや分布記録は, すべて一定の方式に従ってコンピュータに入力され, 植物誌作成のためのデータベースになっていきます。現在までに約14万点のデータが確保されました。データベースが充実すれば, 随時に, 県・市町村あるいは時代別高度別のフロラが機械的に打ち出せます。あとは, 本の体裁をきめれば植物誌はでき上ります。一昨年の3月には「長野県植物誌チェックリスト1959年版」を出版しました。

3. 創立30周年に向けて

会員の皆さんをはじめ, 全国関係各位のお力添えによりまして, とにかく本会は20周年を終了致しました。およそ, このような地味な会は継続して活動を続けることが肝要であり, そうすることによって少しずつ植物学への理解が得られ, 学問の発展に寄与することができると私は思っています。華々しい歩みよりも着実な歩みをきざんでいきたいと思うのです。そして, 30年目には30周年記念号が出ることを心から願っています。そこで, 20周年から30周年に向けて, 本会の活力を一そう高めるために, 全国の同好の皆さんの御入会をお待ちしています。少しばかり宣伝がましいのですが, 会誌のバックナンバー10~19号および「長野県植物誌チェックリスト1959年版」はまだ在庫があります。ぜひとも御購入下さいませお願いします。連絡先は次の通りです。事務局: 〒390 松本市旭3-1-1 信州大学教養部内 電話: 0263-35-4600 内線7184 振替: 長野9-2925番